

出前授業による一貫連携教育の試み（続）

—大学基盤教育科目「追手門 UI 論」の場合—

追手門学院小学校校長 東田 充司

1. はじめに

追手門学院での幼小中高大連携事業に於ける一貫連携教育機構の使命は、当時の梅村修機構長の下記の記載に集約されている。（以下、2014年 幼小中高大連携事業計画より引用）

さて、一貫連携教育機構の使命は、いうまでもなく、こども園から大学院までを備える総合学園として、追手門学院内部の紐帯を固くし、人と情報の行き来を活発にすること、そして2012年3月の学院教育改革検討委員会答申で示された「6つの教育の柱」～志の教育、心の教育、国際教育、自校教育、キャリア教育、一貫連携教育～を具現化し、広く世の中の付託に応えることだ。言い換えれば、未だ緊密とは言い難い、各学・校・園をつなげる仲介の労をとり、人や情報の流れを作ると同時に、既存の、図らざる連携事業にも光を当て、“みえる化”に努めることを任務としている。（以上、引用終わり）

この要請に基づき中学校と幼稚園で実践を行い、昨年度紀要第1号にその報告を行った。今回は、大学基盤教育科目である「追手門 UI 論」特別授業を報告するものである。追手門学院ならではの良き一貫連携の授業展開を希求したく、ここに大方のご批正をお願いする次第である。

2. 基盤教育科目「追手門 UI 論」での実践

自校教育推進を目的に、2013年より「学び論～自校教育講座」として開始されたが、本年度実施科目名称は「追手門 UI 論」である。昨年度まで特別講義として「学院発祥の地へのバスツアー」と称して小学校および大阪城での案内を担当したが、いずれも参加者は20名程度であった。

本年度は「追手門 UI 論」として初年次生の全員履修に近づける目的で時間割が工夫（月～金曜日の3時間目）され、さらにこの科目をCAP制から外す配慮が行われた。この結果、履修時間割の都合等でやむなく不参加（別途レポートの提出が必要）となった履修者があったものの、458名の参加者による「追手門学院の発祥の地を見て、知り、学ぼう」を実施することとなった。

た。

だいたい、みなさんは「追手門」とはなんのことか、ご存じか？学院発祥の地、大手前・追手門学院小学校に行ったことがあるか？追手門の由来も発祥の地も知らないくせに、どうして恥じ入ったり、自信を失ったりするのだろうか。「偏差値が低いから」って？それは皆さんの受験学力に対する世間の偏頗な評価であって、追手門学院とは何の関係もない。

少しオリエンテーションしておこう。この講義は大きく二つに分かれる。

一つは、追手門 127 年の波乱万丈の「歴史」を知ってもらおう。これを「自校史教育」という。講義には学院の歴史について研究している本学の教職員が当たる。

もう一つは、追手門の「今」について知ってもらおう。これを「自校教育」と名づけよう。講義は、追手門を愛してやまない教職員、学生、卒業生が、かわるがわる登壇し、追手門の栄光の歴史も、スキャンダルも、余すところなく語る。受講生はきっと、追手門の一員であることに、大きな“安心感”を抱くようになるだろう。

願わくば、この「追手門 UI 論～自校教育講座」を通じて、みなさんが追手門で学ぶ意義を確認することを。そして、追手門の一員であることに喜びや誇りを抱いてくれることを。

・授業計画

- 1 回目 「自校教育」とは何か～“追手門学院”を学ぶ意義、将軍山会館訪問
- 2 回目 自校史教育 (1)～「追手門の歩み」を使って
- 3 回目 自校史教育 (2)～「追手門の歩み」を使って
- 4 回目 学院志研究室の研究員による研究成果の還元①
- 5 回目 学院志研究室の研究員による研究成果の還元②
- 6 回目 学院発祥の地へのバスツアー（小学校スカイホールでの座学、および大阪城周辺の散策）
- 7 回目 リア充を実現した学生登場、自校教育批判
- 8 回目 教育後援会、山桜会 追大 OB・OG による追手門の今と昔
- 9 回目 グローバルキャリアコース、スポーツキャリアコース、リーダーズ養成コースへの招待
- 10 回目 企業人から見た追手門学院大学の評価、理事長による講話（理事長、学長への手紙）
- 11 回目 追手門をホームに、アウェイで活躍する学生登場！
- 12 回目 大学のスペシャリスト (1)～追手門 Menu「なぜ私は追手門で教員をやっているのか」
- 13 回目 大学のスペシャリスト (1)～追手門 Menu「なぜ私は追手門で事務職員をやっているのか」
- 14 回目 理事長、学長をお招きしての対話集会、追手門 Photo コンテスト～これぞ私の追手門
- 15 回目 期末試験～将軍山会館再訪、追手門検定、青が散る Award に挑戦

（以上、引用終わり）

〔「追手門学院の発祥の地を見て、知り、学ぼう」の実施日および参加者数〕

5月11日(月)	追手門UI論A(村上亨先生ご担当)	101名
5月12日(火)	追手門UI論D(山本直子先生ご担当)	38名
5月14日(木)	追手門UI論B(岸岡奈津子先生ご担当)	141名
5月15日(金)	追手門UI論C(池田輝政先生ご担当)	126名
5月20日(水)	追手門UI論E(梅村修先生ご担当)	52名

※正規の授業時間帯を越えての受講になる関係上、参加者の受講曜日は一致しない

〔講義概要〕「追手門学院の発祥の地を見て、知り、学ぼう」講義資料より抜粋

(1) 豊臣大阪城の石垣について



追手門学院は、旧大阪城三の丸に位置しています。現在の石垣は、後に徳川家康による建造であって、豊臣秀吉時代のものではありません。秀吉による石垣に土盛を行った上で作られたものが現在の石垣で、秀吉時代の石垣は、長い間幻とされてきました。

左の写真は、1979年東館建設時の文化財発掘調査で見つかった『秀吉が築いた』大阪城の石垣です。徳川家康のものとは大きく異なり、小ぶりの岩には加工を施さず、自然の姿そのままに積み上げていく野面積み(のづらづみ)と言われる手法を用いています。

東館地下ホールにそのままに保存するとともに、東門にその一部を移設しています。



東館地下ホールの保存石垣



東門横に移設した石垣

学校周辺にも、秀吉時代の石垣を保存・展示している場所があります。日本経済新聞社とドーンセンターがそうです。現存する大阪城の石垣は、すべて徳川時代のものであるため、これらは当時の様子を明らかにする貴重な資料です。大阪城は当時の築城技術の最高傑作であると言われ、特に基礎を成す「石造り」が優れています。大阪城が「石造りの巨城」といわれる所以でしょう。

また徳川時代の石垣建造に際し、大川から運河を掘って小豆島等から巨石を運んだとされていますが、その運河というのは追手門学院小学校の運動場に作られました。前掲の発掘調査の写真で石垣が切れている箇所（クレーンの前）がその運河跡のようです。

学校周辺の身近な環境の中に、大きな歴史遺産があることをありがたく感じます。追手門の子はみんな大阪城が大好きです。高学年の社会科学習への大きな励みやきっかけになってくれることを願っています。



日本経済新聞社屋南側



ドーンセンター北側

(2) 大阪偕行社について

本校が1888年、大阪偕行社の附属小学校として現在地に設立されたことは周知の通りです。偕行社は陸軍の将校クラブで、全国に存在しました。附属小学校を有していたのは、大阪、広島、旭川でした。

- ・ 広島偕行社附属済美小学校（1893年創立）
小学校・幼稚園を併設し、当初から男女共学。
作家の阿川弘之氏は卒業生。原爆により遺滅。
- ・ 旭川偕行社附属北鎮小学校（1901年創立）
旭川偕行社が設立し、1911年に公立に移管。
旭川市立北鎮小学校として存続している。



大阪城近辺には、陸軍関係の施設が数多くありました。大阪城内に大阪鎮台（後に第四師団に改編）が設けられ、陸軍所（陸軍省の前身）、兵学寮青年学舎（陸軍士官学校の前身）はじめ陸軍の主要施設が大阪城とその周辺に設置されるようになったのが、その最初です。大阪砲兵工廠が大阪城公園や OBP にあったのをご存知の方も多と思います。



【大手前界隈の元陸軍関係施設と現在の姿】

大阪偕行社本社：追手門学院大手前中・高等学校

大阪陸軍病院：大手前病院・大阪歯科大学附属病院

大阪軍人会館：ドーンセンター

(大阪府立男女共同参画・青少年センター)

(3) 大阪偕行社附属中学校・第二山水中学校と同志社香里中学校

1940年4月、大阪偕行社附属中学校が発足し、1期生の入学式が小学校講堂で行われました。枚方市香里に校舎を建設し、1942年11月の完成までは小学校で授業が行われました。この間、戦時下での資金不足により、同じ陸軍関係の東京の山水（やまみず）育英会と合併し、第二山水中学校として再出発しました。大阪市内の空襲が激しくなり、大阪偕行社附属小学校が学童疎開を行った際、5年生までは箕面と石切に学舎を設けましたが、6年生は香里の第二山水中学校に通学しました。

戦後、大阪偕行社と同様に山水育英会も陸軍関係の団体ということで解散命令が出されます。しかし第二山水中学校は、教職員と保護者の努力により香里中・高等学校として新発足し、1951年に同志社香里中・高等学校となります。あくまで個人的な意見ですが、キリスト教の同志社の系列中高等学校の前身が陸軍関係の学校であるというのは、少なくとも良い印象ではなかろうとも思います。しかし同志社香里は山水時代の卒業生や歴史を非常に大切に下さっており、1998年に山水記念碑を本館前に建てられました。同志社総長・理事長出席下の除幕式で、発祥校校長として当時の川人元追手門学院小学校校長が来賓祝辞を述べる光栄をいただきました。

(4) ヤブランと適塾蘭

土佐堀通に沿った舗道の植栽下部には、ヤブランが植えられています。花が無い時期でも鑑賞に適し、暑さ寒さに強い上に、耐陰性が強くてかなりの日陰でも耐えることから、道路沿いでの植栽には好都合のようです。



京阪東口バス停横のヤブラン



“ユリ科”に属すヤブラン

追手門学院小学校の前庭にも、ランが植えられています。百年碑と太陽電池時計（109期生卒業記念品）の間あたりです。琉球ヤブランの一種で、“適塾蘭”という名前で呼ばれています。



由緒ある適塾蘭



適塾蘭の目印である百年碑

これは1982年に25期生（1914年卒）の緒方富雄氏（東大名誉教授）から株分けして贈られたものです。その昔、蘭学者の緒方洪庵が自宅の庭に植え、日ごと眺めていたと言われ、それを代々守り育ててきたものとのことです。ご寄贈いただいた緒方富雄氏は、5期生（1893年卒）の緒方知三郎氏（東大名誉教授・文化勲章受賞）の甥でいらっしゃいますが、知三郎氏は緒方洪庵の直系のお孫さんにあたられます。（追手門学院小学校「学校報」第9号 1982. 7. 19より）

現在、重要文化財でもある適塾は、蘭学者、医師であり教育者としても知られる緒方洪庵が幕府の奥医師として江戸に迎えられるまで、1845年（弘化2）から約20年間にわたり住まいし、塾を興した所です。適塾蘭の名前の由来には、医家に「ヤブ」は苦手ということから命名されたと伝えられています。

(5) 昭和初期を伝える照明灯具



追手門学院小学校の本館は第Ⅲ期建設工事に伴い、1998年に新装されました。しかし照明灯具のうちいくつかは1931年当時のものがそのまま利用されています。

設立当時の校舎は、1924年に全面改築されました。ところが、1930年に漏電による出火で一部を残して全焼となりました。1931年に教室・講堂が、翌1932年に本館が竣工しました。

左は本館入口にあるものですが、元のは風雨による痛みが激しくて忠実に模して作り直しました。正面外観全体も、型を取ってそっくりに作っています。昔の姿をご存知の方は、お分かりだと思います。



旧講堂灯具（エントランスホール）



旧講堂シャンデリア（本館第1階段）

旧講堂にあったシャンデリアは、高さを半分にするべく短く切っています。それでも当時の講堂の雰囲気がいつまでも残るのではないかと思います。当時はバドミントンクラブのシャトルがこの上に乗って、取るのに苦労しました。

校門から見える建物外観をファザード保存するとともに、可能な限り照明灯具を保存する方針により、当時の大阪借行社附属小学校本館や講堂の雰囲気を継承することを目指しました。こういった取り組みが評価されて、1998年に社団法人照明学会照明普及会から、照明普及賞優秀施設賞をいただきました。

(6) 平和記念碑



校門横の平和記念碑

校門を入ってすぐ右手、運動場との境に平和記念碑があります。湯川秀樹の名前と“平和”の文字が黒御影石にピカピカの状態で彫りこんである割には、台座はかなりの年代物です。

実はこの“台座”と“玉”、“平和”は、それぞれ設置年代が違います。

何人かの子どもたちから質問があったこの碑についてここで説明します。

裏側にまわると、制作者である美術銅器铸造所“高尾松三郎”の名前がありますが、“西區”という住所の書き方から見て、戦前のものに間違いありません。しかし、“美術銅器”にあたるものがどこにも見当たりません。

この“美術銅器”とは、1937年4月17日建立の“大楠公像”です。楠木正成は、知略武勇の人で後醍醐天皇にその生涯を捧げた大忠臣です。台座正面には今井清師団長揮毫の“七生報国”の青銅版がはめられ、その上部には菊水の家紋が飾られていました。1943年には戦時下の鉄材供出により“大楠公像”は青銅版と共に応召されてしまったのです。制作者を記したプレートは、あまりにも小さく供出から免れたようで、今は歴史の生き証人になっているのです。



“大楠公像”名残のプレート

戦後、追手門学院になってからも、8年余り台座のみの無残な姿であったようです。1946年11月に講和条約調印記念事業として、平和象徴の記念碑として再興することになり、地球を模した球が台座上に設置されました。当初はその左右に平和の象徴である一羽ずつ配置されたようです。ただこの時点では、青銅版のあった箇所は“七生報国”を外したそのままの姿であったようです。

1988年5月29日、創立百周年発祥校記念式典が行われた際に、湯川秀樹博士に以前本校で講演していただいた記念にいただいた自筆書“平和”を銘文として新装して披露しました。日本初のノーベル賞受賞者であるということだけでなく、平和運動に積極的に参加された方の書として、この銘文新装の意義はとても大きいと思います。

(7) 追手門の名前の由来



私たちの学校の名前は、大阪城の大手門（左写真、重要文化財です）に由来します。かつて大阪を“大坂”と表記したように、お城の正門を意味する大手門は、その昔には追手門と表記しました。

名付けの親は、中田守雄追手門学院初代理事長です。大阪府会議長を務められた方で、戦後廃絶の危期にあった本校の存続にご尽力いただきました。

ご息は61期生であり、現在、世界初の国連ボランティアの名誉大使を務める中田武仁氏です。平成5年カンボジア平和の選挙監視員として国連ボランティアの任務中にゲリラの凶弾に遭い、不慮の死を遂げられた中田厚仁氏（91期生）のお父様にあたられます。

※以上『に組ノート』（2004年度118期4年に組学級通信）より抜粋

3. おわりに

学院歌の冒頭は「金城のいらかは高く」である。八束周吉初代学院長先生自らが「民主主義を謳歌し郷土の象徴たる金城の偉容を称え、之にマッチせしめた」（追手門学院中学部自治会誌「あゆみ」創刊号より引用1951年4月）と記載されている通り、追手門学院に集う全ての人々にとって大切なフレーズである。大阪城三の丸に位置する小学校で話を聞き、実際に大阪城に出向いて大阪城の威容を確かめることの価値は極めて高かったと判断している。小学校や大手前中等学校で普段から何気なく大阪城を身近に感じているのと違い、茨木校地に学ぶ学生の皆さんが大きな自校意識を持つ契機になると判断した。今回は紙面の関係で報告を割愛するが、昨年度は1月31日、本年度は1月26日に追手門学院中学校1年の生徒全員が、今回の報告と同趣旨の小学校訪問を行っている。大学生と同様に、追手門学院で学ぶ生徒であることに安堵を感じ、「この中学校で精一杯がんばろう」という前向きな気持ちを抱くことができる一助になったと確信する。

受講学生が足を運んで大手前および大阪城の地への訪問が第一義であった今回の実践では、あえて「出前授業」という括りで表現することがやや不適切であるかもしれない。しかしながら、異校種による授業の意義をふまえ、今後とも一貫連携を進めていく観点から、あえてこの用語を使用したことを付記する。

授業に当たっては動画を含めた映像資料を駆使したが、その内容や方法をさらに検討し、「追手門UI論」に係る皆様方との連携の下、より効果的な自校教育に邁進したいと願うものである。